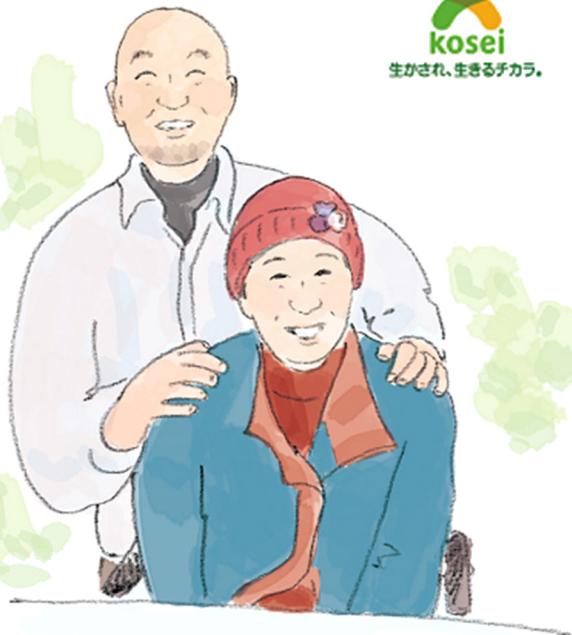


病人としての菩薩行

松江教会 上田有紀さん

上田さんは、以前完治したはずの乳がんが再発、全身の骨へ転移していると診断された。抗がん剤治療の、いつまでも続く苦しみに生きていることすらつらくなっていた。あるとき、尊敬する人から、「病行(病人としての菩薩行)がある。家族のために生きるのよ」と諭され、自分の人生を振り返る。自由奔放な性格で平穩な生活を退屈に感じてしまうばかりか、子煩悩で親孝行だが物静かな夫に対して、甲斐性のない人だと決めつけていた。「家族以外の世界と繋がりたい」と思い、仏教の活動で朝から晩まで飛び回っていた——どれだけ身勝手に生きてきたのかに気づく。夫の支えがないと日常生活もままならなくなつたいま、「一人では生きられない」という《無我》の世界を、全身全霊で味わい、家族や仲間の支えを素直に受け、お世話になった分を感謝でお返しすると心に誓った。そして、「一日でも長く夫のそばにいられたら」と願っている。



健康は最高の利得

釈尊しやくそんは、法句経ほっくきやうにおいて「健康は最高の利得りとく」と説かれてい
 ます。生きている以上、健康であるのは望ましいことです。か
 ら、私たちと同じ人間としての、釈尊のこうしたお言葉を
 聞くと、釈尊が身近な存在に思えてきます。ただ、そのあ
 とにつづけて、釈尊は「満足は最上の宝であり、信賴は最高
 の知己ちきであり、ニルヴァーナ(貪瞋癡とんじんちを滅した境地)は最上
 の楽しみである」ともおっしゃっています。本来、健やかで、
 安らかな身心を与えられている私たちですが、それを十全
 に生かすには、足るたことを知って、まわりの人と仲よくし、
 欲や怒りや自己中心の心(こころ)にふりまわされないことが大切
 である、という釈尊からのお諭さとしと受けとめられます。

私は以前、自分が生きていることによつて世の中の悲しみが少しでもなくなり、世の中の幸せが少しでも多くなるようにと念じて生きることが、私たちにとつての健康状態とお話したことがあります。それを現実にあてはめれば、人を思いやるなかで実践する六波羅蜜ろくはらみつの菩薩行ぼさぎやうは、私たちの日々の大切な精進しやうじんであると同時に、自分本来の元気を活性化させて、人さまにも元気を与える「健康行」に違いありません。自分以外の人の幸せを念じると、私たちの「氣き」は潑刺しやくしとはたらくのです。

